

# 人間再発掘シリーズ



5度目の五輪を目指す重量挙げエース

**パベルに恋して**  
三宅宏実の「いま」

中学3年の三宅宏実(33)「いちご」は、目を輝かせ夢を語る友人たちがどこかうらやましかった。彼らを見るたびに「そうした夢を持ってない自分が嫌いになった」と言う。

母・育代の手ほどきを受けて、3歳から始めたピアノにも熱中できな

い。しかしそれでも、重量挙げだけはやりたいなかった。

友人たちには時々、「お前のお父さんって、オリンピックでメダル獲った凄(すご)い人なんだって？」と聞かれるが詳細は知らない。友だちが宝物のように口にする「メダル」を家で確認しようと考えたが、どこにあるのか、父・義行に尋ねると「よく分らないなあ」と関心のない様子だ。ぼんやりと過ぎていく日々どこか焦りにも似た感情を抱き始め、2000年シドニー五輪(9月15日)の開会式をテレビで観戦

20世紀最後の、同時に2000年代最初の五輪は、メルボルン以来44年ぶりに南半球で開催され、夏季大会では初めて環境に優しい五輪をスローガンとするなど、新時代の幕開けにふさわしいメッセージを発信する大会となった。体操ではトランポリン、テコンドー、トライアスロンといった新競技が始まり、各種目で女性の参加者も増加。メッセージ性と華やかさを備えた五輪開会式に、ピアノでも手芸でも、テニスでも

味わっていない胸の高鳴りを、入場行進で感じる。世界中から集まって来たアスリートたちの笑顔、胸を張



シドニー五輪で、旗手の井上康生を先頭に入場する日本選手団

って行進する堂々とした様子、選手たちが心からの敬意を払う観客の拍手が画面を通して聞こえて来る。晴れるような思いがした。

「本当に、ワーツ、なんて素晴らしい世界なんだろう。こういう場所に自分も立ってみたい、すぐにそう思わせてくれるほどの輝きを画面から感じました。こんなにも近くにあって夢なのに、探すのに10何年もかかってしまったなんて…」

開会式で五輪に出ると抱いた夢は、すぐに何の種目で出場するかも最高のタイミングで決めてくれた。シドニーから女子重量挙げが新種目となり、仲嘉真理(現姓平良、自衛隊)が7位入賞を果たした姿に感

「男っばい」と決めつけていた重量挙げへの先入観が、一気に

すぐに兄に打ち明けたのは、意地のように避けてきた競技を始めるのに、父には言いにくく、もちろん母に「ピアノは辞める」とも言えなかったからだ。年の離れた兄のアシストで両親に伝わったものの、反応はよくはなかった。義行は反対し、育代も、競技の過酷さ、五輪を目指すレベルに挑戦する厳しさを知り尽くしているだけに「やってほしくない」と言った。しかし初めて自分で描いた夢を、簡単に諦めるわけにはいか

敬称略

【デイリースポーツ制定「ホワイト・ベアスポーツ賞」受賞者編】

「本本当に、ワーツ、なんて素晴らしい世界なんだろう。こういう場所に自分も立ってみたい、すぐにそう思わせてくれるほどの輝きを画面から感じました。こんなにも近くにあって夢なのに、探すのに10何年もかかってしまったなんて…」

開会式で五輪に出ると抱いた夢は、すぐに何の種目で出場するかも最高のタイミングで決めてくれた。シドニーから女子重量挙げが新種目となり、仲嘉真理(現姓平良、自衛隊)が7位入賞を果たした姿に感

毎週火～金曜掲載 <取材・文>増島みどり